

# 鳥類モニタリングの可能性を探る

藤田剛<sup>1</sup>・植田睦之<sup>2</sup>・天野一葉<sup>3</sup>

1 東大院・農、2 バードリサーチ、3 WWF ジャパン

生物のモニタリングは、生物や生息地の現状監視や、保全活動などがうまく機能しているかを評価する調査活動です。モニタリングは、対象地域の自然再生や生態系管理にあたって、重要な役割を担うと考えられています。日本でも、古くから環境省やNGOを中心にさまざまなモニタリングが実施されてきました。特に近年、環境省のモニタリングサイト 1000 に象徴されるような新しい取り組みが増え、モニタリングも新しい段階に入りつつあります。しかし、その反面、モニタリングが自然再生や生態系管理に積極的な貢献をした例は、まだ限られているのが現状です。

鳥類は、調べやすさや身近さ、象徴性などモニタリングの対象として優れた点をもっています。また、調査実施に必要なアマチュア調査者層も豊富であるといった条件も整っており、早くからモニタリングが盛んに行われてきました。日本の野生生物の中では、もっともモニタリングデータが蓄積している系統のひとつではないでしょうか。モニタリングの可能性をさぐる上で、データと実施上のノウハウの両方が蓄積されているという利点をもっている訳です。つまり、鳥類研究者は他の野生生物モニタリングをリードしていく立場にあるのです。

この自由集会では、鳥類のモニタリングがもっともっと盛んになり、保全活動をはじめとするさまざまな場面で、そのデータが積極的な役割を果せる可能性を探る一環として、モニタリングのもつ可能性や問題点解決策にかかわる話題提供を目指します。

## ○ どうやって楽に調べるか？ 話題提供者：植田睦之

「最新のハイテクとローテクを駆使した鳥のモニタリング」

鳥類のモニタリングは進んでいるとはいえ、まだまだ調べられていない種や生息地があります。この問題の解決策として、楽に必要な情報が得られる技術やシステムを開発することがあります。ここでは、最新のハイテクやローテク(?)を駆使し、楽に必要な情報がシステムティックに得られるシステムを構築していく取り組みを紹介します。

## ○ どうやって精度を高めるか？ 話題提供者：藤田剛

「どれくらい粗くても、どれくらい歪んでいても大丈夫か？」

モニタリングは長く続くほど、広い範囲でできるほど、データの価値は高くなります。しかし、どうしても年や場所によって調査人数がちがったり、調査精度がばらついたりします。このようなデータを、どうやって補正すればいいのか、どのような解析をすればいいのか、そしてこのような補正はどの範囲まで可能なのかを検討します。

## ○ どうやって普及するか？ 話題提供者：天野一葉

「シギ・チドリモニタリングのためのボランティア育成に向けて」

モニタリングを長期間、広範囲にわたって実施するためには、地域の理解や調査員のリクルートが必要ですが、調査員の高齢化・新人の不足という問題を抱えています。長年の地道なデータの発表の場をつくり、モニタリング調査への地域の理解を深める、継続的なモニタリングに向けた取り組みを紹介します。